

観音物語 (25) すなおがいい

ねんねんもっしょう ぎ かん ぜ おんじょうしやう おく の う し や く の う い き え こ
 念念勿生疑 観世音浄聖 於苦惱死厄 能為作依怙

ゆめゆめ 念念疑いを生ずること勿れ 観世音は浄聖にして 苦惱死厄に於て 能く為に依怙と作る

これまで観音力のいろいろな場面を見てきた。須弥山や金剛山から落下しても助かったり、泥棒に遭遇してもその盗賊が涙を流して改心したり、自由を奪われ、呪われてもその場から解放されたりした。あるいは、野獣やマムシに迫られ、雷が落ちても、間違っただけによる冤罪も、観音さまがみごとにその場の危機を救ってくださるというスリリングな場面が次々と展開されてきた。

右と左の道に迷ったとき、あなたならばどちらを選ぶだろうか。

右を選べば大きな損害を受ける覚悟が必要であるが、しかし、この右への舵取りは多くの人々が助かる道でもある。その反対に、左を選べば大儲けをするだろうが、しかし、この行使によって多くの人たちが苦しみを受けるにちがいない。

どちらを選ぶにしても、そのときの事情を鑑みて胸に手を当てるとよい。平素から観音さまに手を合わせている人は、このようなときに胸浮かびの観音力を戴くことができる。この観音力をすなおに信じるか、あるいは疑うかはあなた次第である。観音さまの力を疑う人と、信じて帰依する人とは雲泥の差があることを以下に述べてみよう。

とんでもない交通事故にあって一命を取りとめた人がこの世の中には大勢おられる。その人が平素から観音さまを信仰していれば、心から御礼を申し上げるであろう。あとから考えれば不思議としか思えないことに気づいて、その事故のために残りの人生を仏道に励む人さえいる。

その反対に、観音力を信用しない人は、交通事故で助かったのは自分の運が良かったのだと単純に喜ぶだけである。困難に遭遇したその意味を深く学ばずして人生の妙味を見過ごしていくのであろう。

「宗教家はすぐに感謝せよ、感謝せよというが、妻が亡くなり、家が流されても感謝せよというのか」

こんな愚痴をこぼす人がいる。気の毒な境遇に返すことばも失ってしまう。

しかし、この世の中は、見えないものや聞こえないものばかりである。知ることができない深い因縁に包まれていることを悟るには、不平不満では窺うことができない。感謝の念があればこそ視野が広がって真実が見えてくる。

すなおに観音力を念ずることによって自分の真実の境遇を知ることができる。それゆえに、高い地位から突き落とされても怪我はなく、無事でいられる。野獣のような盗賊も感謝の念に変わることができるのである。人生の妙味を深く理解するには、すなおに観音さまに手を合わせることだ。観音さまは悩める人々に喜びごとを運んでくださる。この世に生まれた意味をしっかりと教えてくださる。だから、人のために尽すことに生き甲斐が感じられるようになるのである。

すなおな人は固定観念がない。心がのびやかで、表情が穏やかである。だから人が集まってくる。疑い深い人は顔に皺を寄せて笑顔がない。自己主張が強いので人が遠ざかっていく。たとえ、すなおすぎてだまされたとしても、その結果に悔いはない。わが親のように遠慮なく頼ることができるのが観音さまの妙力である。